Osaka University Knowledge Archive

Title	「于」「於」両字の古音に就いて
Author(s)	財津, 愛象
Citation	懐徳. 1929, 7, p. 27-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88785
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

以上論ずる所を要約すれば、凡て歴史的研究は箇々の文献を精密に攻究したる後、之を地理を背景とし時代の線索によりて連絡するにありと云ふにすぎず。然れども之は寧ろ理想論に近く實行に易からず。尤も實行し易き方法は先づ自れの研究せんと志す方面の先進の著述を一讀し、其人名、地名、書名の熟知せざるものに遇ふ毎に、之を廿四史の列傳、方輿紀要、及び四庫全書提要に參觀して、先進の著述に誤なきや否やを考へ、かくして其發達の概要を會得したる後、特種材料を研究して既得の知識を進化せしむるを便とす。若し支那文學史を研究せんとすれば王夢曾の中國文學史、經學史を究めんと欲すれば皮錫瑞の經學歴史など好入門書なるべし。

「于」「於」兩字の古音に就いて

財津愛象

一、「詩」中に於ける兩字の用法

于字の詩中に用ひらるゝものは、(一)純粹の歎字として、(二)介字として、(三)於是と訓して歎字的に用ひらるゝものゝ三種である。

(一)純粹の歎字として用ひらるゝもの

于字は單獨に用ひらるゝことなくして、常に嗟字と連用せらる。

(イ)于嗟(麟趾)于嗟麟兮

（ロ）于嗟乎（騶虞）于嗟乎騶虞（權輿）于嗟乎。不承權輿の類。

于嗟は風中三篇七處に用ひらるゝ外、雅頌には其例を見ず、于嗟乎はたゞ風中二篇四處を用ひらるゝのみで、雅頌には用ひられて居ない。

（二）介字として用ひらるゝもの

（葛覃）　黃鳥于飛　集于灌木

（采蘩）　于以采蘩　于沼于沚。

の第二句の于字。

（三）歎字的に用ひらるゝもの

上例第一句中の、于字。

今その介字及歎字的に用ひられたるものをとりて、其の數を表示すれば

	介字	歎字的	計
風	55	45	100
雅 小	82	17	99
雅 大	75	9	84
頌	22	9	31
	234	80	314

となる。

於字は、（一）純粹の歎字として、（二）介字として用ひられて居る。（於粲洒掃の如き場合の於字を、於是の義

に解するものもあるが、余は歎字として取扱ふことゝした。）

（一）純粹の歎字として用ひらるゝもの。

（イ）單獨のもの

（文王）　文王在上。於昭于天。

（靈臺）　王在靈沼。於物魚躍。の類

（ロ）乎字と連用するもの。

（抑）　於乎小子　未知臧否。

（維天之命）　於乎不顯　文王之德之純。の類。

（二）介字として用ひらるゝもの

（靜女）　靜女其姝、俟我於城隅。

（權輿）　於我乎　夏屋渠々、の類

之を風雅頌に就いて檢すれば

	頌	雅		風	
		大	小		
歎字	16	14	1	0	31
介字	1	1	2	12	16
計	17	15	3	12	47

となる。

說文に據れば于字は、亏於也。象气之舒亏。从亏从一。一者其气乎也。」とありて、氣息を本として構成せられたる文字であり、於字は同書に、「象古文烏省」と見ゐて、もと烏と同一字である。烏字下には「烏孝烏也。象形。孔子曰烏于呼也。取其助气。故以爲烏呼」と見ゐて居る。於字を以て于字を解するは、爾雅既にその端を啓き、毛傳之に依り、說文亦之を傳へ、于字を以て於字を解するは、廣雅に於て、之を見ることが出來る。郝氏は爾雅義疏に於て「於與于同亦語詞也。詩書俱古文作于。經典假借作於」といひ、段氏は說文于字下の註に於て「凡詩書用于字。凡論語用於字。蓋于於二字。在周時爲古今字」といひ、ともに于字を以て古く、於字を以て新しいとして居る。これ等は主として、介字の場合に就いて言つたものと考へらるゝが、詩經の用例について見ると、于字の二百三十四に對して、於字は十六で、于字より於字への推移の第一歩を示して居る。かく於字に于字が代るに至つたことは、果して如何なる理由によるであらうか。これには種々の見方もあるであらうが、余は介字としての于字の發音が、漸次變化して、於字と同樣に呼ばるゝやうになつたことが、その重なるものではなからうかと思ふ。即ち我々の知り得る最古の時代に於て、于字と於字とは其音が異つてゐたのであるが、此時代頃から漸次同一になつて來たためでは無からうかと思ふのである。

次に少しく時代は下るが、所謂發聲之詞につきて考ふるに、春秋定公五年の條に於趣入吳とあり。註に於發聲也と見ゐ、荀子勸學篇には于越夷貊之子云々とあり。(于越は干越の誤とする說あれども今從はず。漢書貨殖傳には、譬猶戎翟之與于越云々と見ゐ、顏師古註には于發語聲也于越猶言句吳耳とあり。)等しく越の發聲として於于兩字が用ひられて居る。此場合に於ては兩字は恐らく越と雙聲に呼ばれたであらうと考へられる。次に歎字の場合に就きて考ふるに、上揭の例に於ても知らるゝが如く、

于字

(1)單用せられずして嗟字と連りて用ひらる。(單用の場合は于以采蘩。之子于歸の類にして於字單用の場合と趣を異にして居る。吁字單用の例はあるが、これは呼字單用と相通ずるものと見るべきであらう。

(2)國風中にのみ用ひらる。

於字

(1)單用せらる。

(2)乎字と連用せらる。

(3)雅頌にのみ用ひらる。

等、其の用法全然同一であるとは見難い。更に他書に例を求むれば、於字は於乎、烏乎、於戲等が、その主なるもので、匡謬正俗には、「今文尚書悉爲於戲字。古文尚書悉爲烏呼字。而詩皆云於乎」と見にて居る。此等に因りて見れば、於烏兩字の同音なることが知らるゝとともに、於烏兩字と乎戲兩字とは却つて音を異にしてゐたといふことが想像せらるゝ。もし於乎兩字同音ならば、嗟字を重ねて嗟々とするが如く、(周頌臣工、商頌烈祖)於字を重ねて於於として事足る譯である。然らば乎字と同音と考へらるゝ于字とも、恐らく異つたものであつたであらうと考へられる。禮記月令、大雩帝の鄭註に、雩。吁嗟求雨之祭也。とあり。又周官女巫疏中に、董仲舒曰、雩求雨之術、呼嗟之歌の語がある。吁又は呼は後世までg又はKの頭音を以て殘つて居る。もし于嗟を以て于嗟と同一とする(馬獻忠、馬氏文通)ならば、于嗟の于と於乎の於とは、いよ〳〵同音とは見難いこととなるのである。

さて兩字の古音に就いて、段氏は說文于字下の註に「按今音于羽俱切。於央居切。烏哀都切。然古無是分別也。」

といひ。郝氏は爾雅義疏に於て、「說文引孔子曰烏于呼也。取其助气。及以爲烏呼。然則烏呼雙聲疊韻之字。」といひ、又「烏于呼三字古皆同聲。故經典或借於爲于。」といつて、烏于呼三字の古代に於て同聲であつたことを言つてゐる。段氏に從へば、すべてu（又はw）を頭音とすることになるであらうし、郝氏に從へば、もし呼に後世のg.k.の頭音があることを許せば、於于烏にもg.k.の頭音があつたこととなる譯である。以上はたゞ用法上より見ての想像論に過ぎない。然らば實際此等諸文字の古音が、何處まで辿らるゝあらうか。

二、于烏於字の古音

まづ現代音に就いて考へて見るに

	Giles氏	Karlgren氏
1. 烏嗚槁搗搗搗鳥等	wu	u
2. 於淤旅等	yü	u,ü
	yü	ü
3. 于宇盂竽等	yü	ü
汚杇坊扞等	wu	u

となり

1. 烏及烏聲の文字は wu (G) u (K)
2. 於及於聲の文字は yü (G) ü,u (K)
3. 于及于聲の文字は yü 又は wu (G氏) ü 又は u (K氏) となる。

右に示すが如く、烏嗚等の音を寫すに、G氏はwuを以てし、K氏はuを以てし、又於于を寫すに一はyüを以てし、他はüを以てして居る。さすれば、此等諸字の音wuとu、yüとüとは文字に寫してこそ差別はあれ、實際に於ては殆んど區別し難いほど類似のものであらう。兩氏の寫音法を混用すれば、種々混雜を來すので、余は以下G氏の寫音法によることとする。

さて于聲の文字にwuとyüと兩音ありとすれば、兩者の關係は如何のものであらうか。大正十二年十二月羽田博士によつて、東洋學報誌上に發表せられた漢蕃對音千字文は一九〇八年佛國のPelliot氏によつて燉煌千佛洞から發見せられたものであるが、同博士の考證によれば、其の時代は唐代の中期以前と思しく、當時燉煌地方に行はれた、比較的正しき支那中部の聲音を西藏文字によつて寫されたものであるといふことである。今これによつて唐代から今日迄の間にwからyに移つたものを擧げて見れば

宛	'wen	yüan
員	'win	yüan
冤	war	yüeh
鶯	we	ying
尹	'win	yin

等である。これによつて見れば、wからyへの變化は當然許さるべきである。そこで前にかへつて考へて見ると、于聲の文字がwuとyüとの兩音に現在發音せられて居るといふことは、もと、wuであつたものが、一は其儘に留まり、一はyüに變つたものと見て然るべきであらう。さすれば此場合に於ては、wuは古くてyüは新しいといふことになる。これから推論の歩を進むれば、まづ于於烏三字も前時代に於ては、wu或は之に近

似の音を以て呼ばれたであらうといふ假定を立てることが出來る。

次に同じく漢蕃對音千字文によつて於烏于中の文字を索むると、於字がu音を以て示されてゐることを發見する。又隋書によつて見るとuigurが烏護と音譯せられて居る。さすれば、烏於兩字は唐代前後に於てはuの頭音を以て呼ばれたものであらうと考へられる。更に The Journal of the Royal Asiatic Society, july 1926 には F. W. Thomas 氏等によつて A Chinese Buddhist Text in Tibetion Writing の一篇が發表せられて居る。（以下此論文の略稱としてC.T.W.を用ふ）これによると、於はʻiの音を以て寫されて居る。iとyとは頗る近似の音である。然らば一方に於ては既にuより轉化せるʻi音があつたものと見ねばならぬ。我邦に於ては古く、阿行のウオに烏於二字が假用せられて居る。烏於兩字はもと同一字にして同音であつたに相違ない。それがウ、オ、と音を異にするに至つたのは烏は舊き音に留まり、オは iʷO（Kalgren氏の古音）となり、遂に單純なるoの如く變じたものと考へらるゝ。次に于字の音は如何といふに現代に於て、于それ自身はyüと發音せられ、他の于聲の文字はwuと發音せらるゝ點、韻鏡に於て內轉第十二合、喩母三等に屬して居る點、日本に傳へられたる音がwuである點、唐代に於てwiuと發音せられし尹字（漢蕃對音千字文）が廣韻に於て于準切である點等を考へ合すれば直接に于字の音は見當らないけれども、烏於兩字がu音を有したる時には、于字と亦相並んで、wu又はuと呼ばれたであらう。以上を約言すれば唐代に於ては

烏　u

於　ʻi, u

于　u又はwu

であつたといふことになる。

烏於の二字は姑く措き、于字に就きていへば、于字に古くg又はKの頭音があつたことは既に學者の辨ずる所である。更に于聲の文字訏吁疧盱等に就きて考ふるに、此等の文字は廣韻に於ては上平十虞に屬し況于切であり、韻鏡には、內轉第十二喉音曉母に屬してその頭音はhである。なほ于聲の夸字は廣韻にては、下平九麻にあつて苦瓜切、韻鏡にては內轉第三十牙音溪母に屬して頭音はKである。以上を併せ考ふれば于字はもとgの頭音を有しやがてKとなり、nとなり、遂に此等を失ひてwuとなり更にyüとなつたものであるまいか。烏於兩字に就いては、寡聞なる余は、詮索未だ周からざるためか、gKの頭音があつたといふ的確なる證左を得ない。で今は姑くその最古の音をu(韻を加ふればuoか)であつたと考へるより外ない。

三、于字と乎字

乎字の詩に用ひらるゝものは歎字、介字、助字の三種である。今于乎兩字の關係を見るに、

(1) 歎字の塲合の相通

列子周穆王篇。於于余一人。(釋文音烏乎)(郝氏爾雅義疏による)

(2) 助字の塲合

論語　孝乎惟孝。釋文及漢石經乎並作于。(釋文及經傳釋詞による)

管子山國軌篇。不籍而贍國爲之有道于。(宋本如是今本于譌作予)(經傳釋詞による)

呂氏春秋審應篇。然則先生聖于。(高註曰于乎也。)

列子黃帝篇。今女三鄙至此乎。(釋文曰乎本又作于)(經傳釋詞による)

莊子人間世篇。不爲社者且幾有蘄乎。(釋文曰崔本作于)

(3) 介字としての同一用法。

（イ）普通の場合

（氓）（于）送子涉淇。至于頓丘

（桑中）（乎）期我乎桑中。要我乎上宮。

（ロ）倒置の場合

（淸人）（乎）二矛重英　河上乎翺翔

二矛重喬　河上乎逍遙

（崧高）（于）四國于蕃　四方于宣

である。右の諸例に於て、于乎兩字が相通じたことは明であらう。然らば乎字の發音は如何。

(1) 現代音（北京）hu　u　廣東（K氏による）

(2) 廣韻に於ては上平十一模戶吳切。之を韻鏡に檢すれば胡と同音にして、內轉第十二合喉音匣母濁音に屬して頭音はgである。

(3) 廣韻に於て乎と同音なる胡湖は現代に於てもなほ乎と同音huであるが、その音符たる古は現代までkuである、又狐字の如きもその音符瓜は今日Kuaと發音せらる。

(4) 乎聲の字呼の音は現時huである。廣韻に於ては上平十一模火故切で、之を韻鏡に照せば內轉第十二合喉音曉母に屬し、頭音は既にhとなつて居る。

以上によりて考ふれば、乎字も亦于字と同じくgKhの頭音を有したことが知られる。更に此字が朝鮮日本に於て如何に假用せらるゝかといふに

三國史記新羅本紀には

八世阿達羅王二十年（漢靈帝の建寧四年、我が成務天皇の四十年）夏五月、倭女王卑彌乎、遣使來聘

と見にkō の音に用ひられてゐる。我が邦にては

乎阿尼乃彌己等（天壽國曼荼羅繡帳銘）

乎沙多宮　同　上

乎波利王　（上宮太子系譜）

乎波智君　（上宮記逸文）

彌乎國　（上宮記逸文）

乎富等大公王　（上宮記逸文）

の如くwoの音を以てあらはれて居る。（大矢透氏、假名源流考）かく見來れば、乎字は殆んど于字と同樣の徑路を辿つたものと考へられる。

以上烏於于乎の四字に就いて、多少其の變化を吟味したのであるが、これ等種々の發音は、必ずしも縱に時代的に規則正しく變化するにあらずして、橫に地方的にそれ〴〵行はれて居て、それが相觸れ相混じて、ある意義を表はす場合には舊音を保存し、他の意義を表はす場合には變化音が用ひられるといふやうにして漸次各時代の大體をある音に於て支配するといふ風になつたのではなからうか。古代音韻のことは漠として捕捉し難いが、上述の諸項に基きて想像を逞うすることが許さるゝならば、左の諸音が此等の文字に存在したのではなからうかと思ふ。

	(1)	(2)	(3)	(4)
于	guo	kuo	huo	uo

乎	guo	kuo	huo	uo
於	?	?	?	uo
烏	?	?	?	uo

此等は諸家の研究によれば皆同一韻である。大矢透氏は此等を第三固部に入れてuoを以て表はされて居る。今之を假りて種々變化せる頭音に配すれば右表の如くなるのである。これをとりて上に述べたるところを實にすれば

一、歎字于嗟の場合の于は、もと(1)或は(2)の音であつたものが漸次烏於と同音に呼ばるゝに至つたもので、過渡の時代に於ては恐らく兩者並存したであらう。

二、發聲之詞の場合は(4)に於て通じたものであらう。

三、介字の場合は于字乎字の(1)或は(2)の音漸次變化して、(4)の音となり、於字と代るに至つたものであらう。

四、助字の場合と歎字於乎於于の場合には于乎ともに(1)(2)の音に留まつたのであらう。

五、歎字的に用ひられたる于字(余はこれを介字の目的格を省略せる場合と考ふ。)亦(4)の音に用ひられたのであらう。